

サロベツの自然と地域で広がる NPO 活動

嶋崎 暁啓

要 旨

北海道北部のサロベツ湿原は、面積約 6,700 ha を誇る国内第 3 位の湿原である。利尻礼文サロベツ国立公園に指定され、ラムサール条約に登録されるなど、優れた自然環境を有するが、戦後の農地開拓を経て面積は半分に減少し、現在も湿原周辺に掘られた水路から地下水が流出することで乾燥化が進行するなど、大きな問題となっている。そのため、2005 年に上サロベツ自然再生協議会が設立され、地域住民や関係機関の協働により「湿原と農業の共生」を目指す自然再生事業が始まった。

NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワークは、サロベツの豊かな自然を次世代に引き継ぐことを目的に 2004 年に設立され、環境保全・環境教育・地域づくりを柱とした活動を展開している。サロベツ湿原センターを拠点に、国立公園の自然を守り、魅力を伝える活動をはじめ、自然再生の普及、地域資源を活かしたツアーなどを通じて、地域の活性化にも寄与している。

1 サロベツ湿原の豊かな自然

北海道の北部、日本海側に沿って広がるサロベツ原野は、稚内市・豊富町・幌延町にまたがる約 20,000 ha ほどの広大な平野部を指し、そのうち約 6,700 ha が湿原となっている(写真 1)。「サロベツ」という地名はアイヌ語の「サル・オ・ペツ」が語源で、「湿原を流れる川」という意味になる。

サロベツ地域一帯では 550 種以上の植物が確認され、季節により様々な花で彩られる広大な湿原と、地平線の彼方にそびえ立つ利尻山の姿は雄大そのもの。こうした優れた自然景観と多様な動植物が評価され、1974 年、洋上に浮かぶ利尻島・礼文島の二つの島とともに国立公園に指定された。



写真 1 上空から見たサロベツ湿原。手前から腫沼・ペンケ北沼・ペンケ沼、奥にパンケ沼、右側にはサロベツ川の流れと日本海が見える。

今年度はちょうど国立公園指定 40 周年の節目となり、記念フォーラムなど関連行事が開催された。また、2005 年にはオオヒシクイやコハクチョウをはじめとする渡り鳥の飛来地として国際的に重要な湿地として認められ、ラムサール条約に登録された。

釧路湿原、別寒辺牛湿原について国内で 3 番目に大きなサロベツ湿原は、寒冷で水分の多い環境のため、枯れた植物遺体が分解されないまま泥炭となり、1年に 1mm 程度ずつ、約 6,000 年もの時間をかけて堆積してきた。サロベツ湿原の最大の特徴は、通常は山岳地帯などに発達するミズゴケを主体とする高層湿原が平地にも関わらず大面積で広がっていることである。その面積は 562 ha に及び、日本最大規模を誇る。高層湿原は地下水位よりも泥炭層が高く盛り上がっているため周辺から栄養分が流れ込まない貧栄養の環境となる。そのため、こうした過酷な環境でも生きていけるツルコケモモ・ヒメジャクナゲ・トキソウ・サワラン・モウセンゴケなどの小さく可憐な植物が高層湿原の代表種となる。

サロベツにおける湿原研究の歴史は古く、1961 年から 10 年間に渡って行われた「サロベツ総合調査」は、当時世界最先端の総合的な環境調査と評されており、その後 60 年以上続く湿原研究の基礎となっている。

サロベツに固有の動植物はいないが、国内では

道北地域のみで繁殖が確認されているツメナガセキレイやコモチカナヘビが生息している。その他、国内では尾瀬などごく一部の湿原でしか確認されていないナガバノモウセンゴケや世界最小の哺乳類とされるトウキョウトガリネズミ、今では姿を見ることが少なくなってしまった草原の鳥、シマアオジなどの貴重な生き物も数多く生息している(写真2)。また、湿原内には日本最大の動く浮島「瞳沼」も存在する。

2 上サロベツ自然再生事業

1947年当時、14,600 haもの面積があったサロベツ湿原は、1960年頃の大規模な農地開発により、一変する。サロベツ川放水路開削に代表される大規模な河川のショートカットや多数の水路により急速に湿原の排水が進められた。サロベツ湿原の北側は多くが農地となり、湿原面積はこの半世紀で半分以下(約46%)にまで減少した。

一方、かつては不毛の大地と呼ばれていたこの土地は、開拓を経て北海道内有数の酪農地帯へと姿を変え、酪農は町の主産業となっている。現在、豊富町の年間生乳生産量は68,000 tに達している。これは平均的な日本人210万人が1年間に飲む牛乳に相当する膨大な量である。豊富町産の牛乳は北海道内の大手コンビニエンスストアのプライベートブランド商品として流通しているため、お飲みになられた方もいるかと思うが、数字の上では北海道内の人口の4割近くを豊富町産の牛乳で賄ってしまう計算となる。

しかし、農業としては成功したものの、地域には大きな課題が残された。開発を免れた湿原の南側部分も、周囲に掘られた無数の水路からは絶えず地下水が流出することになり、徐々に周辺部か

ら乾燥化が進む結果となった。地下水位が低下すると、湿原内にはチマキザサが侵入し、元々存在した湿原植生は失われていく。各種調査から導き出されたササの侵入速度は、顕著なところでは年間50 cmから130 cmと推定されている。このように6,000年かけて成立してきたサロベツ湿原は、人為的要因によりわずか50年間で大きく変化し、このままでは湿原は消失してしまいかねない危機的な状況に陥った。

そこで2005年、地域住民や湿原の研究者、農業団体や自然系団体、豊富町・環境省・北海道開発局・林野庁・宗谷総合振興局など行政機関が参画して、①湿原の自然再生、②農業の振興、③地域づくりを目標とする上サロベツ自然再生協議会が設立された。湿原の保全・再生はもちろんのことだが、農業の振興や地域づくりも重視していることがこの協議会の特徴となっている。そして、当法人も他の行政機関と共に協議会の運営事務局を担っている。

2014年の時点で、すでにくつもの自然再生事業が実際に行われているので、詳しい内容をお知りになりたい方は豊富町のホームページから資料をダウンロードしてご覧いただきたい。代表的な取り組みとしては、湿原と農地の間に25 m幅で設けられた緩衝帯だろう。以前は湿原と農地とが1本の水路(明渠)で隔てられていたため、湿原側からは水が抜けて乾燥化が進行し、隣接する農地側では排水不良が起きて牧草の生産性が低下したり、トラクターが不整地にはまるなど、双方に問題が生じていた。そこで、従来の排水路から農地側に25 m入った場所に新たにもう1本水路を掘り、旧排水路は一部を堰き止めることでプール状に水をため、地下水位を高く保つことで湿原の水が抜けにくくなるようにした。そして、新排水路からは農地の水が速やかに排水されるように、25 m幅の緩衝帯で地下水位を調整する仕組みが整えられた(写真3)。

現在までのところ、緩衝帯のモニタリング結果は良好で、狙い通りの調整機能が発揮されていることが確認されている。計画では事業効果が高いと予想される区間で、総延長10.5 km整備されることになっており、すでに大部分が完成している。非常に画期的な取り組みだが、驚くべきことにこの事業は酪農家側が25 m幅の土地(全体で約26 ha)を無償提供することで実現している。ただ、関係者によるとここまでの道のりは決して平坦なものではなかったと聞く。酪農家にとっては、先祖が苦勞して開拓した大切な農地を湿原のために手放すということは非常に抵抗感があり、緩衝帯



写真2 左上：ヒメシャクナゲ、左下：ツメナガセキレイ、右上：コモチカナヘビ、右下：ナガバノモウセンゴケ。



写真3 左側が湿原で、中央の水路2本に挟まれた部分が緩衝帯。右側は農地。緩衝帯は元々農地だった場所に新たな水路を掘り25m幅で作られた。

を作りたいなら湿原側に作れば良いという声もあったそうだ。しかし、行政や専門家など中に入り2年間かけて議論を重ね、ようやく農家の理解を得ることができた。緩衝帯設置は酪農家の多大な理解がなければ難しく、多くの反対や葛藤を乗り越えて先進的な取り組みを実現させた関係者の粘り強い努力には本当に頭が下がる思いである。

3 NPO 活動のはじまり

NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワークは、サロベツの豊かで美しい自然環境を次世代に引き継ぐことを目的として2004年に地域の有志によって設立された。早いもので今年度10周年を迎えた。この間、サロベツでは2005年に前述のように上サロベツ自然再生事業協議会が立ち上がり、同じ年にラムサール条約に登録された。さらに2011年にはサロベツ湿原センターがオープンするなど、湿原の保全に向けて大きな動きがいくつもあった。こうした地域における気運の高まりと社会的な求めに歩調を合わせながら当法人も地域に根差しながら活動を続けている。活動を支えて下さる会員の方は地元の豊富町や宗谷管内を中心に150名ほどおり、地域住民はもとより酪農家や漁家、商店主、行政職員や研究者など幅広く、最近では旅行でサロベツを訪れたことをきっかけに、仲間になって下さる方もおり、サロベツのファンが着実に増えていることを嬉しく思う。会員の中には、東京などの遠方にお住まいの方で普段はなかなか活動に参加できないものの、東京で開催されるイベントの時にPR活動を手伝っていただける方もおり、新たなつながりに感謝している。こうしたサロベツの自然を大切に想ってくださるすべて人々の力により、私たちの活動は一步ずつ前に

進んでいる。

当法人は次の3つの項目を活動の柱と位置付けている。1つ目は「環境保全」、2つ目は「環境教育」、そして3つ目は「地域づくり」である。そのために様々なアプローチで湿原に迫り、人をつなぎ、保全活動を展開している。具体的な活動内容については、次にご紹介したい。

4 湿原の今を知り、守る ～環境保全～

サロベツの自然のことを伝える前に、まずは私たちがサロベツのことを良く知らなければならない。ただし、私たちは研究者ではないので本格的な調査は難しく、日常の中でできることから基本的な自然情報を蓄積している。植物については開花日を記録し、野鳥についても飛来の初認日などを記録している。地道だが、現地にいるからこそできる記録を一つひとつ積み重ね、長く続けることで有益な情報を得たいと考えている。なお、これらの情報は当法人が毎年制作・販売しているオリジナルカレンダーにも盛り込んでいるため、一般の方もカレンダーを眺めながら、「そろそろあの花が咲くころだから木道を歩きに行ってみよう」、「今年は前年よりも開花が早いようだ」、「渡り鳥の飛来が遅いようだ」などというように年ごとの変化を感じながら楽しめるようになっている。

また、サロベツで調査している研究者とのつながりも大切にしていきたいと考えており、調査に同行し、作業をお手伝いさせていただくことで、普段は私たちもなかなか行けない場所に行けたり、最新の研究成果を教えていただいている。今年度から湿原センターに研究紹介コーナーを設けたので、来館された方々にもサロベツにおける湿原研究の最前線を知っていただけるようになってきた。

近年はサロベツ周辺の道北地域で大規模な風車の建設計画が持ち上がっており、当法人でも対応に追われている。サロベツは細長くなっている北海道北部の先端部に位置するため、渡り鳥の移動ルートが集中し、日本に飛来する多く渡り鳥にとってはちょうど玄関口に当たる。風車の建設計画は最大1,000基というこれまでとは桁違いの数であり、猛禽類やガン・カモ類をはじめ、深刻な影響が懸念されている。そのため、春と秋にはガン・カモ類の調査を行ったり、オジロワシなど猛禽類調査を日本野鳥の会などと連携しながら進めている。ガン・カモ類については、あまりにも広大なサロベツ全域を調査することは困難なので、

主な飛来地を把握し、ピーク時の個体数や飛行ルートを調査している（写真4）。

その他、特定外来生物のオオハングソウやセイヨウオオマルハナバチについて、国立公園内やその周辺を巡視し、発見しだい除去をしている。オオハングソウは、2009年以降、これまでに2トン以上除去しているが、毎年のように湿原周辺で新たな群落が発見されている。しかも、オオハングソウは湿原周辺の牧草地わきや国道沿い、線路沿いなどに山ほど生えているため、とてもすべてを取り除くことはできない。人数も限られているため、国立公園の水際で防ぐのが精一杯である（写真5）。もちろん、特定外来生物以外にも、湿原内で外来種を見つけた場合は除去を進めている。セイヨウオオマルハナバチについては、数年前にサロベツ湿原センターの木道入口のテラス下に巣を作られたこともあり、海岸草原や湿原でも確実に増えて来ていると思われるが、巣を特定するのが難しいため、対策は進んでいない。

また、近年増加の一途をたどるエゾシカについても各種調査を行っている。サロベツ湿原においても湿原植物の食害が確認されており、最新の調

査ではゼンテイカやタチギボウシ・ノハナショウブ・ミヤマアキノキリンソウなど12科18種の被害が明らかになっている。これらの食害は短期的には影響が出ないかもしれないが、長期的には湿原植生を変えてしまう恐れがあり、効果的な個体数調整を図るための基礎調査として、環境省の委託を受けて生息状況調査や季節移動の解明を行っている。

このほか、利用者の方々が安心して木道を利用していただけるように、木道の日常的な維持管理を行っている。サロベツ全体では一般の方が利用可能な木道が4.8km（うち、2kmが車椅子でも大丈夫なバリアフリー木道）、さらに自然再生事業や調査のために使用される調査用木道が5.8km敷設されている。木道の総延長は10.6kmに達するため、草刈りや補修作業は何日もかかる大変なものである。また、水分の多い湿原という厳しい条件のため、木道の傷みも進みやすく、春先には融雪水で浮き上がって移動していたり、水没してしまう箇所もあるが、安全・快適に利用していただけるよう、日々点検と補修に努めている。

5 伝え、未来を育てる ～環境教育～

調査の結果得られた知見や、湿原の魅力、重要性を地域内外に発信していくため、普及啓発にも力を入れている。遠方の方にはホームページや会報などを通じて、また、サロベツ湿原センターの展示や地元の文化祭などでもパネル展示を行っている。

人材育成についても、今後ますます地域の人口が減少していく中で、将来の保全の担い手を育てていくことは極めて重要であると考えている。通年の子供向けプログラムの「なまら!!サロベツ∞クラブ」では、継続的な人材育成を行っている。「なまら!!」で始まる一風変わった名前の当クラブは、初期メンバーが相談して名付けたもので、「サロベツの自然が大好きな子供たちのクラブ」にしたいという願いと、「子供たちには無限の可能性がある!」という意味が込められている。毎月活動している中のいくつかご紹介すると、春と秋にはサロベツに飛来する渡り鳥を観察したり、初夏には湿原に咲く花々を観察し、見所マップをまとめて湿原センターに展示している。夏はワークキャンプを行い、カヤックに乗り水鳥の目線で水生植物の観察。冬はスノーシューを履いて森と湿原を探検している（写真6）。

また年に一度、北海道内または全国のラムサー



写真4 秋の渡りのピーク時には8,000羽に達するオオヒシクイの群れ。昼間は牧草地に出て餌を食べ、夜は安全な沼に入り休息する。



写真5 湿原センターの木道わきでブタナやメマツヨイグサを除去。

ル条約湿地の子どもたちが集まる交流会に参加し、日頃の活動発表などを行っている。交流活動に参加する子ども達は自分たちのフィールドを良く知った上で他地域の自然に触れることで、サロベツの自然を外からの視点で見ることができる。そのため、初めてサロベツ湿原を見つめ直して特徴を理解したり、発表や交流の機会を通して刺激を受け、自らの考えをまとめ、伝える自信が生まれたりする。成果が出るのは彼らが成長するこれからだ、将来はサロベツから次世代の環境リーダーが育っていくことを期待している。このほか、学校の遠足や社会見学で地域の子も達が湿原センターを訪れたり、スタッフが小学校に出掛けて行く出前授業など、学校との連携も深めており、様々な形で地域の子も達が湿原に関わる機会を創出している。

また、一般向けの市民講座としては月1回程度の「サロベツ自然語講座」を通年開催しており、毎回20名ほどが受講している。室内での座学と屋外でのフィールド活動がセットになっており、知識と体験を結びつけながら、サロベツについてより深いテーマで体系的に学ぶことができるプログラムである。さらに、一年の最後には、これまでのおさらいの意味も含め「サロベツ検定」というマニアックな検定が用意されている。初級レベルは簡単だが、中級・上級になるとこれが意外と難しい。過去の検定問題はセンターで保管しているため、興味がある方はぜひ挑戦してみたいだろうか。

地元高校生や一般の大学生を対象としたサブレンジャー（センターを拠点に国立公園の保全活動やガイド活動を行う学生たち）活動や、インターシップの受入も行い、環境分野の人材育成にも努めている。また大学などの教育旅行の問い合わせも時々あり、モニター段階ではあるが、湿原保全の最前線を知ることができる研修プログラムを

提供している。

ガイド活動については、一昨年度から個人向けと団体バスツアー向けの自然ガイドを本格的に開始し、個人旅行者を中心に年々利用者が増えて来ている。「湿原の魅力」というのは少々玄人向けで、一見ただけでは伝わりにくい部分も多いが、専門知識を持ったスタッフが解説することで、目の前の景色が違ったものになり興味も増す。サロベツの場合、自然のみならず酪農や漁業、温泉など素晴らしい素材がありながら、ガイドやエコツアーの分野はこれまであまり手が付けられていなかった。そのため、発展の余地も十分に残っており、この恵まれた資源を大切にしながら活かし、新たな人々のニーズを掘り起こしていきたい。

また、豊富温泉の各宿に毎週湿原の花の開花情報を提供したり、宿泊業者向けの学習会を開催するなど、地域の観光業との連携した取り組みも増えてきた。そのような中で温泉と市街地を結ぶフットパスの整備が行われ、当法人も協力している。このように、子どもから大人まで、地元の方から遠方の方まで、様々な形でサロベツの自然に触れる機会を提供し、伝える活動を行っている。

6 地域と人々をつなぐ ～地域づくり～

地域において仲間作りを進めるため、地域住民や行政と一体となった清掃や植樹活動にも取り組んでいる。

天塩川の河口から稚内まで伸びる海岸線は6月から8月にかけて海岸草原にゼンテイカ（エゾカンゾウ）やエゾスカシユリ、ハマナスなどが咲き乱れる（写真7）。40 km以上も続く砂浜や利尻島の姿、そして夕陽が素晴らしい風光明媚な場所だが、海流の関係で漂着ゴミが非常に多く、地元では常に頭を痛めている。また、発泡スチロールや



写真6 カヤックに乗り、オオヒシクイの餌となるヒシの実などを観察。



写真7 6月下旬、湿原全体を黄色く染めるエゾカンゾウの群落。

ペットボトルなどの軽いゴミは強風で飛ばされやすく、海岸草原や牧草地にまで飛散してしまうので、砂浜だけでなく広い範囲の清掃が必要である。

当法人は毎年4月上旬に利尻礼文サロベツ国立公園パークボランティアの会と共催で、海岸草原の清掃活動を行っている。毎年参加者が増えており、今年度は約70名を超える参加者があった。わずか2時間ほどの作業で、2トントラック4台分ものゴミが集まった。6月には地元高校生、そして7月には豊富町主催による300人規模の海岸清掃活動がそれぞれ行われている。根本的な解決をすることは難しいが、美しい景観を保つためにこれからも地域ぐるみで清掃活動は続けていく必要があるだろう（写真8）。

清掃活動については、海岸線だけでなく湿原内を横断する道路や、湿原内のサロベツ川・ペンケ沼などにおいても実施している。中でもサロベツ川とペンケ沼の清掃は、陸上からのアプローチが困難なため、カヤック数艇に乗り込み、川を下りながら清掃をしている。ペンケ沼はサロベツ湿原の中央部に位置し、人が立ち入れない場所のため、ラムサール条約の登録エリア内でも最もコアな部分である。サロベツに飛来するほとんどのガン・カモ類がねぐらとして利用しているほか、2004年からはタンチョウの繁殖も確認されており、文字通り「野鳥の楽園」となっている。しかし、上流から流れ込んだ生活ゴミが沼に大量に堆積しており、毎回カヤックが沈むのではないかとというほど、ゴミを満載して帰ってくる。地域の人々がゴミを捨てている現状は残念なことだが、サロベツの川や沼で私たちがゴミを回収することは、この地域から出たゴミが、海へ出て世界中の砂浜を汚すことを未然に防ぐことにもつながっている。

稚咲内砂丘林はサロベツ湿原の西側、海岸線に沿って南北に25km以上連なる帯状の森林である。砂丘林の名のとおり、数列の砂丘の上に約



写真8 植生への影響を軽減するために春先に実施する海岸草原清掃。

4,000年かけて森林が成立し、砂丘間には大小170以上の湖沼や湿原が点在している。通常は入ることができない場所だが、ミコアイサの国内唯一の繁殖地となっており、他ではなかなか見ることができない特異な自然景観を持っている。ほぼ全域が国立公園の特別保護地区に指定されているが、海岸線に近い一部の森では、過去に放牧がおこなわれたことが原因で3haほど裸地になってしまった場所があり、地域住民や行政が協力して植樹活動を行っている。

2005年から始まった稚咲内砂丘林再生活動は、来年度で10年を迎える。ここ5年ほどでようやく軌道に乗って来たが、最初の5年間は失敗の連続だった。地域の方に協力していただき、現地産のミズナラ種子を採集して直接播種していたが、植える場所は土壌がほとんどなく、保水性の乏しい砂地であることや、海からの猛烈な潮風が直撃する厳しい条件だったため、数年にわたり播種した17,000個もの種子は全滅してしまった。そのため、途中からは植樹地の近くに苗畑を設け、シードトラップを用いて良質な種を集め、数年間かけて苗木を育てて植樹する方法に切り替えた。今では優先して植樹すべき区域の全域で植樹を終えることができ、その周辺部において新たな植樹活動が始まっている。とはいえ、植樹したミズナラが育ち森になるまでには長い年月がかかる。ましてや、対象地の過酷な環境では成長も遅く、簡単には進まない。当面は周囲の草本よりも樹高が高くなるまで継続的な下草刈りなどが必要だと考えている。また、近年はイタヤカエデやエゾヤマザクラなど、現地に自生している他の樹種も苗木から育てて植え始めている。最初の頃は失敗続きで、一度は諦めかけていた地域の方々も、苗木が活着するようになってからは再び明るさを取り戻し、子供からお年寄りまで豊かな森に戻る日を夢見て共に活動に励んでいる（写真9）。



写真9 住民参加で国立公園内のミズナラの森を再生している。

7 自然再生をもっと身近に

サロベツでは前述の通り、自然再生事業が行われている。ただ、これらの事業は地域住民からしてみると日常生活との関わりが薄く、湿原の奥で行われているために直接目に触れる機会はまずない。したがって、自然再生と言っても、どこで何が行われているのかを知っている住民はほとんどいない。だからと言って、自然再生に関する勉強会を開催しても一般の方はそれほど集まらないだろう。そもそも、なぜ湿原が大切なのかということがわからなければ、再生事業を行う意味も見えて来ないと思われる。

そこで、少しでも自然再生の敷居を低く、身近なものにできるようにと始められたのが「サロベツ・エコモー・プロジェクト」である。「エコモー」というのは、エコロジーの「エコ」と、牛の鳴き声の「モー」を組み合わせた造語で、公募により選ばれた。自然と農業の共存を目指している自然再生の愛称としてはピッタリというわけだ。

自然再生は、地域に暮らす人やサロベツに関わる人により支えられていく。そのため、人と自然が共生するサロベツならではの特徴ある地域づくりを進めるための運動であり、2008年より始まった。自然再生事業の普及の一環なので、①自然再生を伝える、②人や団体のつながりを作る、③地域への想いを育てる、ことを目標としているが、あまり難しいことは言わず、まずはサロベツの自然・産業・歴史・文化を楽しむ活動の輪を広げ、参加者同士の交流を生み出すお祭りのような楽しいプロジェクトである。

一例を挙げると、酪農家の方々による地域の美化清掃活動や酪農体験受け入れ、マラソン愛好家によるサロベツ湿原を一周する50kmのマラソン大会や、サロベツにちなんだ食材を使ったカレーを食べながらサロベツの話をする会、地元高校生による修学旅行先でのサロベツ観光PR活動、子どもたちとオリジナルのサロベツソングを作る活動など、サロベツに関わることなら基本的に何でも歓迎しているのでバラエティ豊かである。このプロジェクトは、「エコモー☆サポーター」と呼ばれる有志によって運営されており、地域の個人や団体、行政機関、そして当法人も運営に関わっている。

最初の年は9団体9活動からスタートし、年を追うごとにプロジェクトの輪が広がっており、2014年は30団体30活動が行われた。ちなみに、活動実施者の方々のことは「エコモー☆メンバー」と呼んでおり、年に一度「エコモー☆メンバー交

流会」という活動報告会と交流会を兼ねた催しを行っている。今まで知らなかった他団体の活動を知ることで人の交流が始まったり、同じプロジェクトのメンバーとして連帯感が生まれ、仲間意識の向上にもつながっている。

サロベツ・エコモー・プロジェクトには続きがある。これまで自然の関係者と農業の関係者というのは近くて遠い存在だった。それは過去に水を巡る対立の歴史があったからかもしれないが、同じ地域に暮らしながら互いの接点はほとんどなかった。そこで、湿原と農地のちょうど間に建っているサロベツ湿原センターを会場として、2012年より、自然と農業の共生をテーマとしたイベントを開催し、両者が一緒にPRする機会としている。農協などの協力を得て牧草ロールやラップサイレージを展示したり、トラクターの試乗、自然再生のパネルを見てクイズに答えると豊富牛乳がもらえるクイズラリーや秋の湿原を楽しむ木道ガイドツアー、豊富牛乳を使った当日限定のオリジナルメニューの提供、ミニ・フォーラムなどが行われ、地域内外から200人以上が訪れている。

この他に、「サロベツ・エコモー・ツアー」という自然再生事業地を訪ねる見学ツアーも行われている。このツアーも2012年に始まり、今年が3年目。環境省と当法人の自然ガイドが連携したプログラムで、湿原の持つ魅力や面白さを感じながら、乾燥化の問題や、湿原を守るために行われている様々な取り組みについて楽しみながら知ることができる内容になっている。

最初に室内で環境省の自然保護官と、当法人の自然ガイドからサロベツ湿原の自然の特徴や自然再生事業に関するレクチャーを受けた後、普段は立入禁止になっている調査用の木道を特別に歩いて湿原の奥まで行く。そして、実際に事業地を見学するのだが、ただ見るだけでは飽きられてしまうため、リピーターとして何度も参加してもらえるように、今年から簡単な作業体験を盛り込むことにした。たとえば、今年度行った全3回のツアーのうち、1回目は旧サロベツ原生花園跡地の木道に行き、テープで記された過去のササの前線の位置を比較しながら、最新のササ前線にマークを付ける作業を行った。2回目は泥炭採掘跡地に行き、40年間植生が回復していない裸地で植生回復を促すための植生マットを敷いた(写真10)。3回目は放水路開削の影響で一度消失したものの、現在は復元された沼に行き、水生生物の調査・観察を行った。いずれの作業も、また翌年の時点ではそれぞれ変化があるかもしれない、気になる方は自分の目で確かめるためにまた参加してくれるのでは



写真10 40年間裸地になっていた泥炭採掘跡地に植生ネットを張る参加者たち。

ないかと期待している。

ツアーでは1人分の幅しかない細い木道を歩くため、各回の定員を15名に絞っているが、毎回定員いっぱいの参加者が集まり、おかげさまで好評をいただいている。ツアー後のアンケート結果からも自然再生事業への関心が以前よりも高まり、理解が進んだとの回答が得られている。参加者層は、地元の方が25%~30%程度で、残りは稚内市など周辺市町村の方となっている。リピーターも3分の1から半分ほど含まれる。人数に制約があるため、どうしても一度に伝えられる人数は限られているが、その分効果が高い活動であるため、プログラムを工夫しながらこれからも続けていきたいと考えている。

8 サロベツ湿原センター

2011年4月にオープンしたサロベツ湿原センターは、旧ビジターセンターの老朽化対策や湿原に対する環境負荷の軽減を図るため、従来の場所から約1.5km東側に位置する泥炭採掘工場の跡地に建てられた(写真11)。

「人と自然の共生」をテーマに掲げるサロベツ湿原センターは、湿原の成り立ちやサロベツ地域に生息する主な動植物、最新の自然情報などについてパネルや映像展示等で紹介している。また、ラムサール条約や自然再生事業、泥炭採掘史を伝える浚渫船や工場の機械類、酪農や漁業といった地域産業を紹介するコーナーなどが設けられている。

湿原内を巡る1kmの周回木道を歩くと、低層~中間~高層湿原へと、湿原の発達過程を見ることができ、植生の変化が楽しめる。自然が好きであれば、足元に咲く可愛らしい花々から、見渡す限りの湿原風景、野鳥の美しいさえずりを



写真11 湿原の保全活動や普及の拠点となっているサロベツ湿原センター。

心ゆくまでお楽しみいただけるだろう。サロベツは春夏秋冬、どの季節にお越しいただいても、その時々素晴らしさがある。お近くの方も、遠方の方もぜひ足をお運びいただければ幸いである。

9 おわりに

10年目を迎えた当法人の歩みも、湿原の悠久の歴史からしてみれば、ほんの一瞬の出来事に過ぎない。この10年は泥炭の堆積で表せば、わずか1cm。しかし、この10年を振り返ると、少しずつではあるが、地元でもようやく湿原をはじめとする地域の自然に目が向くようになってきたように感じられる。地域の人々が真にサロベツの魅力に触れ、理解し、自分たちの言葉でサロベツの素晴らしさを語り始めるまでには、まだ何年かかるだろう。しかし、着実に前に進んでいる手応えもあり、今の子どもたちが成長し、親になる頃には、サロベツを愛する仲間が地域内外でさらに増えていることを期待している。

私たちも湿原の恵みについて、地域住民、あるいは地球に暮らす一人ひとりにとって、どのような関わりがあり、恩恵を受けているのか、今はまだ上手に説明できていない。しかし、当たり前すぎて意識されていないだけで、「つながり」は確実に存在しているはずである。こうした人と自然との関わりについて「見える化」を図り、しっかりと伝えていくことを次の10年の目標としていきたい。

嶋崎 暁啓 (しまざき としひろ)

1982年生まれ。日本大学大学院生物資源科学研究科修了。NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク事務局長。サロベツの自然環境保全と次世代を担う人材育成に取り組み地域住民と行政の橋渡し、学生の指導などを行っている。